

# 勝林寺寺報

光雲無碍如虚空

一切の有碍にさわりな

し 光沢かふらぬものぞな

難思議を帰命せよ

日常おつとめする正信偈のあとにお唱えする  
和讃の第四首目です。

「光雲無碍如虚空」。

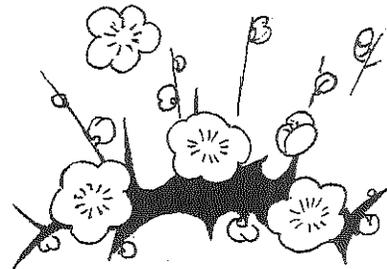
この一句は、中国の曇鸞大師さまの「讚阿弥陀仏偈」の原文そのままです。この漢文の語句の力づよい響きに魅せられたからでしょう。親鸞さまは、そのまま和讃に引用しました。如来さまの救いの光りの力づよさを表現するにはこの語句しかないとお感じになられたからではないでしょうか。

親鸞さまは、わたしたちの如来さまを、「壽命無量を体(たい・姿)とし、光明無量の徳用(とくよう・はたらき)を離れたまわす」(「消息集」と説明されています。ある先生はこれを「薬とその効用」と理解すればよいと言われます。このことは、お正信偈には「光明・名号顕因縁」と言って、わたしたちの如来さまは「光明」と「名号(呼び声)」とをもってわたしに現に働きかけてくださるのだと教えて下さっています。

さて、わたしたちは、神や仏といえば、信仰する対象、お願いごとをしてお経りする神秘的対象とありますが、これらはみな、わたしのうす汚い欲望の反映でしかありません。自分勝手な欲望の反映でしかありません。

「一切の有碍」というのは「よるずの障りあること」と親鸞さまは左のふり仮名に解説して下さいます。すなわち、「すべての限界あるもの」という意味で、我に対して他者とか、大に対して小。(我他彼此)。多少、増減、高低、貴賤など等、比較・対立・撰別・差別・競争・相剋・闘争のこの世界、わたしたちの欲望煩悩の世界です。そんなあさましいわたしたちの世界を、しかし、満遍なく照

らし潤し(光沢をこうむらせ)てくださる如来様。  
わたしたちの狭い小さい愚かな凡夫の智慧では、到底、思い量ることのできない光りの雲が、今、世界中をおおい、念じ育くみ包んでくださるのです。その如来さまに素直に「お恥ずかしいことです」、「ありがとうございます」と懺悔シ合掌しようではないかと、親鸞さま、お誘い下さるのです。



葬儀

十二月三日

上小田 岩上 常夫様 八十四歳

十二月十八日

片間 水嶋 元三様 九十歳

十二月二十五日

口小谷 宮嶋喜代志様 九十四歳

本年もよろしくお願いたします  
平成二十六年元旦 勝林寺

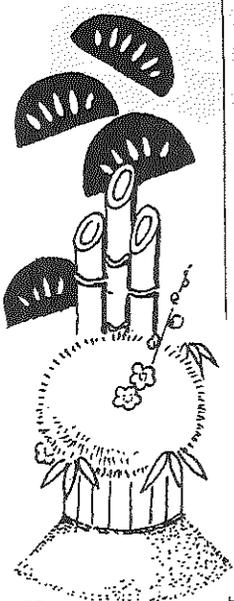
## 迎春

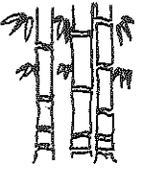
|              |       |       |
|--------------|-------|-------|
| 寺族           | 住職    | 西池 匡紹 |
| 坊守           | 西池 美幸 |       |
| 後継住職         | 西池 深音 |       |
| 前任住職         | 西池 哲俊 |       |
| 西池 希里        | 西池 入海 |       |
| 西池 武志        | 中島 正和 |       |
| 責任役員         | 大石 正和 |       |
| 総代会長         | 玉井 克哉 |       |
| 総代           | 湯口 博文 |       |
| 総代           | 中嶋 英樹 |       |
| 総代 (仏壯副会長)   | 田中 重雄 |       |
| 総代 (法輪会顧問)   | 永井孝一郎 |       |
| 総代           | 田中 嘉信 |       |
| 仏壯会長         | 足立幸夫  |       |
| 副会長          | 永井 正人 |       |
| 會計           | 坂本 智  |       |
| 事務局          | 稲葉 保夫 |       |
| 事務局          | 山田 紀夫 |       |
| 事務局          | 湯口 裕  |       |
| 事務局          | 山田 博文 |       |
| 事務局          | 齋藤 庄治 |       |
| 仏婦会長         | 濱 嘉子  |       |
| 副会長          | 齋藤 典子 |       |
| 副会長          | 山田 仁美 |       |
| 副会長          | 渋谷 順子 |       |
| 副会長          | 数森 成美 |       |
| 會計           | 齋藤 洋子 |       |
| 事務局          | 藤川 貴恵 |       |
| 事務局          | 齋藤 昌子 |       |
| 事務局 (法輪会世話人) | 岩上加代子 |       |
| 連盟理事         | 平野 睦美 |       |
| 法輪会代表 (仏壯顧問) | 坂本 貢  |       |
| 世話人          | 坂本 光隆 |       |
| 世話人          | 大石 正代 |       |
| 世話人          | 中島 雪枝 |       |

### 一月 勝林寺 予定

|         |              |
|---------|--------------|
| 一日(水)   | 修正会          |
| 四日(土)   | 年始参り (但東町方面) |
| 九日(木)   | 会計監査         |
| 十一日(土)  | 坪口           |
| 十二日(日)  | 総代会          |
| 十三日(月)  | 光顯寺 前任一周忌    |
| 十四日(火)  | 岩上 悟宅 忌明法要   |
| 十五日(水)  | 坪口 (女中講)     |
| 十六日(木)  | 坪口           |
| 十七日(金)  | 出石           |
| 十八日(土)  | 永井哲雄宅 三回忌    |
| 十九日(日)  | 榎見 (女中講)     |
| 二十日(月)  | 榎見           |
| 二十一日(火) | 榎見           |
| 二十二日(水) | 仏壯三役会        |
| 二十六日(日) | 齋藤明宏宅 三回忌    |
| 二十九日(水) | みのりを聞く会      |
|         | 仏壯役員会        |

(敬称略)





### つれづれ草

吉田兼好の随筆集「徒然草」(百四十三段)に、人の終焉(シユマエ)(臨終)の有り様の、いみじかりし(立派だった)事など、人の語るを聞くに、ただ「静かにして乱れず」といつたら、(それだけで)ころにくかるべき(感心させられるはずなのに)、(世間の)愚かな人は、わざと不思議な異様なすがたをつけ(付加し)、その人の言ったことばも振る舞い(態度)も、おのれの(こっちの)好む方(好きなよう)に褒めなす(作って褒める)のは、(亡くなった)その人の本意にはあらずや(本意ではない)ではないか)と覚ゆれ(つい思えてしまう)。

この(人の臨終)の一大事は、権化(ミカ) (神仏の霊をもち)の人も、(自分では)定むべからず(決めることは出来ない)。博学(学問を究めた)の士(立派なお方)も、(自分では)はかるべからず(勝手に決められません)。(ましてや)人の(他人の)見聞く(うわさばなし)には依る(耳を傾けては)べからず(なりません)。

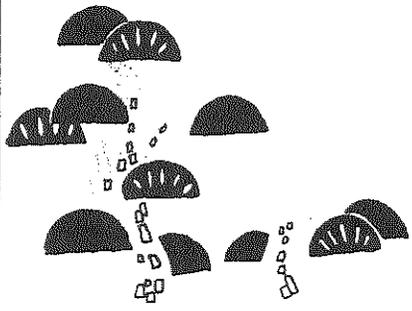
平安・鎌倉時代。「臨終行儀」といって、臨終の人は仏像の手から延べられた糸を持ち、口に念仏を唱えて、専心に仏・菩薩のご来迎を念じ祈るのでした(「来迎往生」ライオウオウシ)。親族知人も経文を唱え念仏して応援しました。そうして始めて来迎のほとけに抱かれて浄土往生ができると考えられていました。

しかし、比叡山の源信僧都(げんしんそうどう)という高僧は、如来さまのまことの心(本願のころ)を正當にうけとめ、親鸞様に伝えて下さいました。親鸞さまは「正信偈」のなかで次ぎのように源信さまの教えを伝えて下さっています。

極重の悪人は、唯だ、仏を称すべし。我も亦、彼の撰取のうちにある。煩惱に眼(まき)障(き)えられて見たてまつらずといえども  
大悲は憐むことなくして常に我を照らしたまう。

わたしのような、何としても救われ様のない罪業深重の悪人は、お互い、「南無阿彌陀仏」とお念仏を申そうではないか。如来さまは「十方衆生を救わねばわたしは仏とは呼ばれません」と誓って阿彌陀如来となられた。この私もそのお誓いのなかに含まれてはいるはず。いえ、小さな自分の欲の目で見れば、この私こそ如来さまの本願のおめあてであり、如来さまは絶え間なくわたしを照らしてくださっているのです。

「死の縁、無量」と言います。どんな死に方をするのか。狂って死ぬか、もがきながら死ぬか。到底、お念仏しながら眠るように息ひきとる、というようにには逝けません。ろくな死にようもできない「極重の悪人」であるこのわたしを、はかり知れない遠い昔から、照らしつづけ、願いつづけ、呼びつづけていくくださる南無阿彌陀仏。どのように考えてみても思っても、計らっても所詮、凡夫、悪人の一人よがりの悪あがき。折角、親が南無阿彌陀仏と呼んでいてくださるのだから、素直にハイと従って、生き、そして死んでいきましょ。



### み仏の

法語カレンダー  
一月の法語

### み名を称ふるわが声は

### わが声ながら

### にふとかりけり

出典 甲斐 和里子「草かご」より

まどに止まり、風に煽られてもしがみつくやぶ蚊の姿に重なる自分がいます。人も突風に煽られそうになるとしがみつくものをさがします。暴風が強まれば、ますます周りが見えず、しがみつくものへの執着が強くなり、手に力がかもるようになります。そうまでして、しがみついていたもの、それは、自分の心です。自分を守るため、一心不乱に自我にしがみつきの続けているのでしよう。

お念仏の教えはそういう自分自身を破り、生きる勇氣と喜びを与えてくださるのだと教えられます。しかし、現実の我々は、破られることを恐れ、なかなか生きる勇氣も喜びも得られず、満たされない心から「本當にお念仏で救われるのか？」と疑問を抱くときがあります。(中略)すると親鸞聖人は、自分も同じだとお答えになります。七五〇年以上も前から、今の私たちと同じ悩みを悩んでおられた人々がいた。その悩みがつかつてきた事実には、驚きと真実を思います。(中略)この、今を生きる私にまで伝わってきたお念仏の歴史には、自分の思い計らいをはるかに超える、無数の念仏申してきた方々がいらっしゃいます。迷ったり、悩んだりしながら「南無阿彌陀仏」の道を歩んでこられた人々の歩みがつながってきたという事実には、自分だけで唱えているお念仏ではないのだと思わされます。(後略) (HPより抜粋)

### どすん

新年のスタートにあたり、恒例の「七大ニュース」で、いろいろあった勝林寺の2013年を振り返ってみます！

第七位 入海、バルーンアートイベントデビュー！

イベントにボランティアとして参加し、風船で動物、お花、剣、ドラえもん！次々に作り上げてプレゼント。子どもたちに笑顔を届けました。

第六位 希里、アカペラピックで「FMジャングル賞」受賞！

高校のお友達6人で思い出づくりに出場したアカペラの大会で賞をいただき、ラジオにも出演しました。

第五位 深音、やっと手に入れた中古の愛車を失う！

たまたま立ち寄ったオートバックス作業場で愛車と共に消火剤を浴び、自らも救急搬送。が、本人はびんびん、想定外の補償金、ちゃっかり前よりいい車をゲット！不運？幸運？

第四位 前任職、最愛の妹(龍野 浄連 寺前坊守)がお浄土へ

幼くして両親を失ったため、いつの時もともに支えあつて成長した妹、若くして任職と死別し、長きにわたり寺と子どもを守り育てた自慢の妹でした。

第三位 坊守、実家で一人で暮らす母が、満九〇歳を迎える！

ご門徒の皆さんには、いつも心にかけていただきありがとうございます。おかげさまで九十歳

第二位 住職、豊岡市社会教育委員長就任！

家庭や寺のためだけでなく、地域のために日々東奔西走しています。

第一位 親鸞聖人

七五〇回大遠忌法要動修！

勝林寺にとって、今年いえこれからずっと忘れられない最大のうれしいニュースでした。